

屋根おろし（上・下野田町）

昔の日本家屋（住まい）は大変火に弱く、消火作業も幼稚だったので、日本國中、至る所で大火事騒ぎがありました。

大正十一年（一九二二年）五月三十一日、人がぐっすり寝入った午前0時過ぎ、下野田町の火の見やぐらの半鐘が鳴り出しました。

ジャン、ジャン、ジャン、ジャン、ジャンの乱れ打ちです。近くが火事だと分かった村人たちは、あわてて外へ飛び出しました。折からの辰巳風（東南の方から吹く風）にあおられて、火の粉が一ぱい降ってきます。

「火事や、火事や、はよ逃げよや。」
大人たちは、家財道具を外へ運び出したり、むしろ（わらで編んだ敷物）を水に濡らして屋根に

掛けたり、上を下への大騒ぎになりました。

昔の家は葛屋といって、屋根は、わらか、かやを干した草でふいてあるので、たまったものではありません。火の粉を浴びると屋根からボウボウ燃え始め、見る見るうちに火の手が広がっていました。

そのうちに、村の佐加屋の酒倉の大きな酒だるに火が入り、五百石（九万リットル）の新酒が、次々と大音響をたててばく発しました。

西田中方面の人は、ボン、ボン、ボン、ボンと大きな音と共に吹き上がる火の柱は、花火よりもきれいだっつたと言われたそうですが、そのそばに住んでいたおばあさん（当時十才）は、頭から火の粉がぎょうさん降ってくるし、ものすごい大きな音はするし、宮前川に飛び込んで両手で両耳をふさぎ、縮み上がっていたと言われます。
それにしても、当時の消化活動は幼稚でした。

下野田町の善照寺の南隣にあつた尽きない水として有名な井戸の中に、手押しポンプ（豊むかしむかし第二集大火事のさし絵19、20ページ参照）のホースが投げ込まれました。人間が手で押して水をくみ上げる小さな消火器ですから、とても火の勢いには勝てません。

それでも、みんなは必死になつて、手おけで井戸水をくみ上げたり、手おけで川の水をくんで消火にあたりました。

丹尾家は、武生の丹尾家へ応援を頼みました。

武生から大勢の人と消防ポンプが何台も駆けつけてきました。近くの町や村からも消防ポンプが何台もきて消火にあたりました。東丹尾家に三つある井戸水も、本家丹尾家に四つあつた井戸水もフル回転、そのうちに風の方向が変わり、午前三時頃火の手はおさまつたといひます。

そして、ただ一軒瓦ぶき屋根だつた東丹尾家で火事をくい止めることができました。

ところが、下野田町の西のはずれの葛屋の一軒が飛び火（家事のとき、火の粉が飛んで離れた所に燃え移る）で焼け出したので、冬島へ応援を頼みました。冬島からは一人も応援に来てくれませんでした。

それもそのはずです。野田から飛んで来る火の粉から自分の家を守るために、むしろを水で濡らして屋根に掛けたり、手おけで水を掛けたり、それはそれは大変だつたのです。

この時の火事で、下野田合わせて二十六軒が焼失しました。

火事の原因はこじき（豊むかしむかし第三集、お助け観音参照）でしたが、それでも、火元の人（着物に縋ひも、はだして村中を謝って歩きました）

このように、火事になつた時の葛屋の恐ろしさを体験した村人たちは、屋根から、わらや、かやの干し草を下ろして瓦にぶき替えました。

これを当時の人は「屋根おろし」といいました。
瓦屋根はお金が沢山入るので大変でしたが、それ
でも、次から次へと屋根おろしをする家が増え、
今では豊地区から葛屋の家は姿を消しました。

葛屋 について

豊地区の人は、かやぶき屋根や、わらぶき屋根
の家を「くずや」と言い、昔はほとんどの家が葛
屋でした。

瓦に比べて夏は涼しく、冬は暖かく、しかも屋
根ぶきの材料になるよし(ニ、三メートルの草丈)
や、すすきが、豊地区内の川辺りや、池や沼に生
い茂っていたので材料はただ(無料)。屋根のふ
き替えは手間がいと言って、隣、近所の人達が労
働力を交換しあって安く出来たので、とても重宝
がられていました。